

<原 著 論 文>

幼稚園教育実習と保育実習の実習成果に関する考察^{注1)}

常磐短期大学幼児教育保育学科（元専任講師） 埼玉学園大学人間学部（非常勤講師）

滝沢真智子

田中道弘

The study of the learning outcome by the training of kindergarten and nursery

Department of Early Childhood Education and Nurture, Saitama Gakuen University Faculty of Humanity

Tokiwa Junior College (Former lecturer)

(Part-time Lecturer)

Machiko Takizawa

Michihiro Tanaka

キーワード：幼稚園教育実習・保育実習，実習成果，自己肯定感，時間的展望

Key word : training of kindergarten and nursery, learning outcome, self-affirmation,
time perspective

概要

本研究では幼稚園教諭と保育士の両資格を取得予定の119名に、自己肯定感尺度と時間的展望体験尺度を用いて実習の意識調査から実習成果を分析した。実習成果の指標として、自己肯定感と過去に対する自己肯定感の平均得点の差に着目したところ、実習を体験した学生の自己肯定感得点は有意に高くなっていることが確認された。時間的展望体験尺度からは、①目標指向性下位尺度の高群は、実習前から実習を楽しみと感じていること、②希望下位尺度の高群は、実習前後共に教育（保育）者として向いていると感じていること、③現在の充実感下位尺度の高群は、実習前に実習が楽しみと感じており、教育（保育）者として向いていると感じていることが明らかになった。

1. はじめに

2006（平成18）年に「就学前の子どもに関する教育，保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が制定され、幼保一体化施設として認定こども園制度が開始された。その結果、幼稚園教諭免許状と保育士資格の両資格取得が求められ、保育士等の資質・専門性の向上について養成校側の役割からも検討事項となった。幼稚園教諭免許状と保育士の両方の資格取得のためには、理論と実践を結ぶ教科である幼稚園教育実習と保育実習が必修となっている。実習は、幼児教育者や保育士を志す学生たちが現実の幼児たちと実際に触れ合う機会を提供する。そのため、学生の中には、実習に対して過剰なまでの不安を抱く者が少なくない。

学生たちの実習に対する過剰な不安を取り除くためには、学生に応じた事前授業が求められる。

また、実習を通じた授業が学生たちにとって有意義なものであれば、学生たちに好ましい変化が現れる（自分を好ましく思える、自信がついた、など）のと同時に、実習授業の成果を示す一つの指標と考えられる。さらには、大学教員がよりよい実習授業を提供することが、そこで学ぶ学生の専門職としての意欲の変化とともに、就職への取り組みにも影響する可能性がある。

ところで、幼稚園教育実習・保育実習に関する研究は、様々な視点から行われているが、その多くは実習に関する意識の研究であった。そのことを示すように、梅田（2002）の研究では、「実習に関する意識」「実習及び事前・事後指導の方法」「評価」の3項目にまとめ、「実習に関する意識の研究」が全体の4分の1を占めていると述べている。この実習に関する意識の研究では、例えば、塚田（2007）は、幼稚園教育実習の意識調査から、実習は保育者としての意欲の高まりと職業選択への関心の高まりに繋がっていくことを述べている。また、実習に関する意識の中でも、特に実習に関する不安が問題になっている。高橋・島崎・井上・森脇・中・田中（2007）は、実習の意識に関する研究において、保育実習前の不安について不安尺度を作成した。その結果、実習前の不安はドロップアウトにつながる恐れのある反面、実習に備えようとする意識の萌芽と述べている。井上・島崎・高橋・植田・森脇（2007）の保育士観について、「理想の保育士」と「現実の自分」の差異得点の高い者は、「現実の自分」を否定的に評価し「理想の保育士」を指針としているため実習に対する不安も大きくなっていると説明している。このように、実習に関する研究では、実習に対する不安の研究が多い。しかし、実習に対する不安などの否定的な感情の背景には、個人的な資質にも問題はないのだろうか。実習に対して否定的な感情を抱きやすい学生の背景には様々な要因があると考えられるが、その一つには自己評価の捉え方にあると考えられる。井上ら（2007）の“「理想の保育士」と「現実の自分」の差異と実習に関する不安の関係の研究では、実習に対する不安が大きい学生は「現実の自分」を否定的に評価している”と、自己への否定的評価について説明している。この自己評価は、自己肯定感の問題（自己肯定感の低さ）と言い換えることも可能である。自己肯定感とは「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情（田中，2005a, 2005b, 2008）」であり、精神的健康の指標である。また、田中の定義にある通り、自己肯定感とは「態度」的要素が強く、比較的安定した感情であると言える。同様の精神的健康の指標の一つに時間的展望がある。時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去と未来についての見解の総体」であり（Lewin, 1951）、「個人の生活空間は、個人が現在の状況と考えているものに決して限られているわけではなく、未来、現在、および過去もその中に含んでいる（Lewin, 1942 末永訳 1954, p. 135)」。また時間的展望について、Allport（1955）は「人間の人格的存在にとって中心的だと考えられる長期的な目標を持っていることが、人間と動物、大人と子ども、それに多くの場合、健康な人格と不健康な人格との違いとなる」と指摘しているように、精神的健康の指標の一つであると言える。自己肯定感も、時間的展望も精神的健康の指標であると同時に、各自の捉え方の程度によって、ある種の行動予測が可能となる。先にも述べたが、学生にとって実習体験が有意義なものであれば、学生たちに好ましい変化が現れ、実習授業の成果を示す一つの指標となる可能性がある。つまりこの指標は、近年、大学教育で盛んに取り入れられているFD（Faculty Development）の新たな基準の一つになるものと

考えられる。このような自己肯定感や時間的展望の視点を導入すると実習授業において、学生ごとに、きめ細やかな実習に対する助言などを提供できる可能性がある。

そこで本研究では、幼稚園教諭免許と保育士の両資格を取得するための実習を終了した学生に対して、実習を振り返らせることにより、実習の不安と教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化について、自己肯定感、時間的展望の視点から検証し、実習成果について考察する。

2. 調査方法および分析方法

(1) 調査対象

短期大学幼児教育保育学科において幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を取得可能となった2年生130名である。

(2) 調査項目・内容

両方の資格を取得するための規定の実習が終了し、実習前に振り返って思い出し、実習後の変化を以下の項目を設けて調査した。

1) 使用した尺度

- ① 自己肯定感尺度 ver.2 (以下「自己肯定感」という) (田中, 2005) の8項目 (4段階評定)。
- ② 過去に対する自己肯定感尺度 (田中, 2009, 以下「過去に対する自己肯定感」) の8項目 (4段階評定)。この尺度は、自己肯定感尺度 ver.2 の質問文を過去形に置き換えたものである。過去に対する自己肯定感尺度の信頼性、および妥当性は、田中・滝沢 (2010) において検証されている。
- ③ 時間的展望体験尺度 (白井, 1994) の18項目 (5段階評定)。時間的展望体験尺度 (以下「時間的展望」という) の下位尺度は、目標指向性 (5項目)、希望 (4項目)、現在の充実感 (5項目)、過去受容 (4項目) の4因子で構成される。

2) 実習の意識に関する調査項目

- ① 実習を体験することによる、実習前・後における不安感の意識の変化
調査項目は、「実習前、実習に行くことに対して……非常に楽しみ・楽しみ・どちらでもない・不安の方がやや大きい・非常に不安」の5件法を採用した。
「実習後は、保育実習と幼稚園教育実習に分けて……非常に楽しかった・楽しかった・どちらでもない・辛かった・とても辛かった」の5件法を採用した。
- ② 実習を体験することによる実習前・後の教育（保育）者に求められる資質の変化^{注2)}
調査項目は、「実習前……判断力・明るさ・指導力・優しさ・礼儀正しさ・包容力・実践力・体力・忍耐力・責任感・積極性・意欲・研究心・根気強さ・身だしなみや言葉遣い・協力的・その他」の17項目の内、上位3項目を選択する。
「実習後……判断力・明るさ・指導力・優しさ・礼儀正しさ・包容力・実践力・体力・忍耐力・責任感・積極性・意欲・研究心・根気強さ・身だしなみや言葉遣い・公正さ・愛する心・その他」の18項目の内、上位3項目を選択する。

- ③ 実習を体験することによる実習前・後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化
調査項目は、「実習前・後について……とても向いている・向いている・どちらともいえない・向いていない・とても向いていない」の5件法で選択した。
- ④ 実習を体験することによる就職意識の変化と就職先
調査項目は、「実習を通して就職先に……変化あった・変化はなかった・その他」と「実習前・後に分けて……公立幼稚園・私立幼稚園・幼稚園（公立私立にこだわらない）・公立保育園・私立保育園・保育園（公立私立にこだわらない）・福祉施設・その他」の中から選択した。
- ⑤ 3年コースの養成課程についての調査
調査項目は、「3年の養成課程でも入学した・3年の養成課程では入学しなかった・どちらでもない」と、それぞれの回答の理由を自由記述で求めた。本研究の調査用紙には、“(2) 調査項目・内容”の個所ですでに記したすべての内容が含まれていたが、本研究ではそのうち1)使用した尺度の①自己肯定感尺度 ver.2, ②過去に対する自己肯定感尺度, ③時間的展望体験尺度と、2)実習の意識に関する調査項目の“①実習を体験することによる、実習前・後における不安感の意識の変化”, および“③実習を体験することによる実習前・後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化”, を分析対象とした。①と③を分析対象とした理由は、他の項目よりも教育実践研究に重要であると考えられたためである。

3) 実習授業の成果の指標

自己肯定感 ver.2 の得点から、過去に対する自己肯定感得点を減じたものを指標とした。

4) 調査期日および分析方法

調査は平成 21 年 10 月。

調査データは、データ分析ソフト SPSS : PASW Statistics18 と STAR を用いた。

3. 調査結果

(1) 性別・年齢

調査対象の 130 名のうち、調査票へ記入漏れのなかったものを有効回答とし、分析対象を 119 名とした。内訳は、男性 2 名、女性 117 名であった。平均年齢は 19.97 歳（19～26 歳）で、性別による年齢、平均は、男性 19.0 歳、女性 19.6 歳であった。

(2) 自己肯定感と過去に対する自己肯定感の分析結果

自己肯定感の信頼性は $\alpha = .880$ 、過去に対する自己肯定感の信頼性は $\alpha = .829$ であった。

自己肯定感と過去に対する自己肯定感の得点範囲は、8 点から 32 点であった。本調査での平均得点は、自己肯定感では 23.25 点 ($SD = 4.50$)、過去に対する自己肯定感では 21.65 点 ($SD = 4.25$) であった (表 1)。実習授業を体験した学生が、実習により自信を得たり、自己肯定感が高まったりするなどの好ましい影響があったかを分析するために、自己肯定感の平均得点から過去

に対する自己肯定感の得点を減算した。その結果、平均得点の差は、自己肯定感の方が、過去に対する自己肯定感よりも 1.6 点高かった。自己肯定感と過去に対する自己肯定感の平均得点について、対応のある t 検定を行ったところ ($t(118) = 7.76, p < .001$) で、有意差がみられた。

次に自己肯定感を基準正規分布を利用して、第 1 および第 3 分位に 3 分割し、その基準をもとに「低群、中群、高群」の 3 群に分けた。自己肯定感は、低群 (10-20 点, 32 名)、中群 (21-26 点, 62 名)、高群 (27-32 点, 25 名) とし、過去に対する自己肯定感は低群 (10-19 点, 33 名)、中群 (20-23 点, 45 名)、高群 (24-32 点, 41 名) に分類した。

自己肯定感と過去に対する自己肯定感について、相関分析を行ったところ、両者に強い相関がみられた ($r = .718$)。自己肯定感と過去に対する自己肯定感について χ^2 検定を行ったところ、有意差が確認されたため ($\chi^2(4) = 101.89, p < .01$) 残差分析を行った。その結果、(表 2) の通り、自己肯定感低群と過去に対する自己肯定感低群と、自己肯定感中群と過去に対する自己肯定感中群、自己肯定感高群と過去に対する自己肯定感高群は人数の偏りが有意に多かった。また自己肯定感低群と過去に対する自己肯定感中群・高群、自己肯定感中群と過去に対する自己肯定感低群、自己肯定感高群と過去に対する自己肯定感低群・中群は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表 1 自己肯定感と過去に対する自己肯定感の結果

	質問項目	平均値	標準偏差
自己肯定感	1. 私は、いくつかの長所を持っている	23.25	4.51
	2. 私は、何をやっても、うまくできない *		
	3. 私は、人並み程度には物事ができる		
	4. 私は、自分のことが好きになれない *		
	5. 私は、物事を前向きに考える方だ		
	6. 私は、自分の事を大切だと感じる		
	7. 私は、時々死んでしまった方がましだと感じる *		
	8. 私は、後悔ばかりしている *		
過去に対する自己肯定感	1. 私は、いくつかの長所を持っていると感じていた	21.65	4.26
	2. 私は、何をやっても、うまくできないと感じていた *		
	3. 私は、人並み程度には物事ができると感じていた		
	4. 私は、自分のことが好きになれないと感じていた *		
	5. 私は、物事を前向きに考える方だと感じていた		
	6. 私は、自分の事を大切だと感じていた		
	7. 私は、時々死んでしまった方がましだと感じていた *		
	8. 私は、後悔ばかりしていると感じていた *		

*は逆転項目

表 2 自己肯定感と過去に対する自己肯定感のクロス表と残差分析結果

	過去に対する自己肯定感		
	低群	中群	高群
自己肯定感低群 ($n=32$)	27 ▲	3 ▼	2 ▼
自己肯定感中群 ($n=62$)	6 ▼	39 ▲	17
自己肯定感高群 ($n=25$)	0 ▼	3 ▼	22 ▲

(▲有意に多い, ▼有意に少ない, $p < .05$)

(3) 自己肯定感と実習の意識に関する調査項目の分析結果

本研究では、対象人数が少なかつたため、クロス表を作成し χ^2 検定を実施する際に 5 段階評

定を、3段階評定にして分析を行うことにした。実習を体験したことによる、実習前・後における不安感の意識の変化を分析するために、「非常に楽しみ、楽しみ、どちらともいえない、不安の方がやや大きい、非常に不安」を「楽しみ、どちらでもない、不安」の3群にまとめた。また、実習後における保育園および幼稚園それぞれに対する意識の「非常に楽しかった、楽しかった、どちらともいえない、辛かった、とても辛かった」を「楽しかった、どちらともいえない、辛かった」の3群にまとめた。実習を体験することによる実習前・後の教育（保育）者に求められる資質の変化についても、「とても向いている、向いている、どちらともいえない、向いていない、とても向いていない」を「向いている、どちらともいえない、向いていない」の3群にまとめ実習前・後それぞれについて分析した。その結果、(表3)の通り、実習後の意識には有意差は確認されなかったものの、自己肯定感と実習前の不安感の意識の変化および、実習を体験することによる実習前と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化については有意差が確認されたため、残差分析を行った。

表3 自己肯定感と実習の意識に関する調査項目のクロス集計と χ^2 検定の結果

質問項目と選択肢		自己肯定感			検定結果	
		低群	中群	高群		
実習前の不安感の意識の変化	楽しみ	2	5	5	$\chi^2(4) = 10.36,$ $p < .05$	
	どちらともいえない	1	4	5		
	不安	29	53	15		
実習後の意識	保育園	楽しかった	12	30	15	<i>n. s.</i>
		どちらともいえない	10	12	5	
		辛かった	10	20	5	
	幼稚園	楽しかった	20	44	19	<i>n. s.</i>
		どちらともいえない	5	10	1	
		辛かった	6	8	5	
教育(保育)者としての向き不向きの意識の変化	実習前	向いている	4	10	11	$\chi^2(4) = 14.14,$ $p < .01$
		どちらともいえない	16	38	12	
		向いていない	12	14	2	
	実習後	向いている	2	15	14	$\chi^2(4) = 18.64,$ $p < .01$
		どちらともいえない	23	34	7	
		向いていない	7	12	4	

そこで下記では、(表3)から有意差がみられた質問項目について結果を示す。

1) 自己肯定感と実習前の不安感の意識の変化の結果

自己肯定感と実習前の不安感の意識の変化について χ^2 検定をおこなったところ有意差が確認された($\chi^2(4) = 10.36, p < .05$)。そこで残差分析を行ったところ、(表4)の通り、自己肯定感高群と「どちらともいえない」は人数の偏りが有意に多く、自己肯定感高群と「不安」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表4 自己肯定感と実習前の不安感の意識の変化についてのクロス表と残差分析結果

	楽しみ	どちらともいえない	不安
自己肯定感低群($n=32$)	2	1	29
自己肯定感中群($n=62$)	5	4	53
自己肯定感高群($n=25$)	5	5▲	15▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

2) 自己肯定感と実習前・後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化の結果

（表3）での分析の際に自己肯定感と実習前の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化について、 χ^2 検定により有意差が確認されたため（ $\chi^2(4) = 14.14, p < .01$ ）、残差分析を行った。その結果（表5）の通り自己肯定感低群と「向いていない」と、自己肯定感高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、また自己肯定感高群と「向いていない」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

次に自己肯定感と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化について、 χ^2 検定を行ったところ有意差が確認された（ $\chi^2(4) = 18.64, p < .01$ ）。残差分析を行ったところ、（表6）の通り、自己肯定感低群と「どちらともいえない」、自己肯定感高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、また、自己肯定感低群と「向いている」、自己肯定感高群と「どちらともいえない」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表5 自己肯定感と実習前の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化のクロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
自己肯定感低群 (<i>n</i> =32)	4	16	12▲
自己肯定感中群 (<i>n</i> =62)	10	38	14
自己肯定感高群 (<i>n</i> =25)	11▲	12	2▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

表6 自己肯定感と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化のクロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
自己肯定感低群 (<i>n</i> =32)	2▽	23▲	7
自己肯定感中群 (<i>n</i> =62)	15	34	12
自己肯定感高群 (<i>n</i> =25)	14▲	7▽	4

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

(4) 過去に対する自己肯定感と実習の意識に関する調査項目の分析結果

過去に対する自己肯定感と実習の意識に関する調査項目についてクロス集計表を作成し χ^2 検定を行ったところ（表7）の通り、過去に対する自己肯定感と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化に有意差が確認された（ $\chi^2(4) = 12.98, p < .05$ ）。

表7 過去に対する自己肯定感と実習の意識に関する調査項目のクロス集計と χ^2 検定の結果

質問項目と選択肢		過去に対する自己肯定感			検定結果	
		低群	中群	高群		
実習前の不安感の意識の変化	楽しみ	3	3	6	<i>n. s.</i>	
	どちらともいえない	1	2	7		
	不安	29	40	28		
実習後の意識	保育園	楽しかった	12	22	23	<i>n. s.</i>
		どちらともいえない	10	8	9	
		辛かった	11	15	9	
	幼稚園	楽しかった	22	33	28	<i>n. s.</i>
		どちらともいえない	5	5	6	
		辛かった	5	7	7	

教育(保育)者としての向き不向き意識の変化	実習前	向いている	5	7	13	n. s.
		どちらともいえない	16	28	22	
		向いていない	12	10	6	
	実習後	向いている	3	10	18	$\chi^2(4) = 12.98,$ $p < .05$
		どちらともいえない	24	24	16	
		向いていない	6	10	7	

そこで過去に対する自己肯定感と実習後の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化に対して残差分析を行ったところ、(表8)の通り、過去に対する自己肯定感低群と「どちらともいえない」と、過去に対する自己肯定感高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、また過去に対する自己肯定感低群と「向いている」、過去に対する自己肯定感高群と「どちらともいえない」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表8 過去に対する自己肯定感と実習後の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化のクロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
過去に対する自己肯定感低群($n=33$)	3▽	24▲	6
過去に対する自己肯定感中群($n=44$)	10	24	10
過去に対する自己肯定感高群($n=41$)	18▲	16▽	7

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

(5) 時間的展望と実習の意識に関する調査項目の分析結果

時間的展望は、下位尺度の4因子の各質問項目の内容に対して最も肯定的な回答に5点が与えられ、最大得点は「目標指向性」が25点、「希望」が20点、「現在の充実感」が25点、「過去受容」が20点であった。各項目の平均得点は、「目標指向性」は16.91点、「希望」は12.18点、「現在の充実感」は16.84点、「過去受容」は14.25点であった(表9)。そこで、時間的展望の4因子について、得点に基準正規分布を利用して、第1および第3分位に3分割し、その基準をもとに「低群、中群、高群」の3群に分けた。「目標指向」は、低群(6-14点, 33名)、中群(15-19点, 51名)、高群(20-25点, 35名)とし、「希望」は、低群(4-10点, 33名)、中群(11-13点, 47名)、高群(14-20点, 39名)とし、「現在の充実感」は低群(5-14点, 35名)、中群(15-19点, 51名)、高群(20-25点, 33名)とし、「過去受容」は低群(4-12点, 39名)、中群(13-16点, 45名)、高群(17-20点, 35名)にそれぞれ分類した。

時間的展望の各下位尺度の3群(低群、中群、高群)と実習に関する調査項目についての3群の人数の偏りについて、 χ^2 検定を行った。その結果、表10、表11、表12のとおり「目標指向性」と「実習前の不安感の意識の変化」に、「希望」と「実習前の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化」と「実習後の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化」に、「現在の充実感」と「実習前の不安感の意識の変化」と「実習後の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化」の項目に、それぞれ有意差が確認された。その一方で、「過去受容」と実習に関する調査項目には人数の偏りに有意差は確認されなかった。そこで以下では、時間的展望の下位尺度

のうち、有意差が確認された「目標指向性」「希望」「現在の充実感」と実習の意識に関する調査項目について、残差分析を行った。

表 9 時間的展望体験尺度の各下位尺度の平均得点と標準偏差

	質問項目	平均値	標準偏差
目標指向性	1. 私は、だいたいの将来計画がある	16.91	4.11
	2. 将来のために考えて今から準備している事がある		
	3. 私には、将来の目標がある		
	4. 私の将来は漠然としていて、つかみどころがない *		
	5. 将来のことは余り考えたくない *		
希望	6. 私の将来には、希望が持てる	12.18	3.33
	7. 10年後、私はどうなっているか、よくわからない *		
	8. 自分の将来は自分でできひらく自信がある		
	9. 私には、未来がないような気がする *		
現在の充実感	10. 毎日の生活が充実している	16.84	4.49
	11. 今の生活に満足している		
	12. 毎日が同じことの繰り返しで退屈だ *		
	13. 毎日がなんとなく過ぎていく *		
	14. 今の自分は本当の自分ではないような気がする *		
過去の受容	15. 私は、自分の過去を受け入れる事ができる	14.25	3.69
	16. 過去のことはあまり思い出したくない *		
	17. 私の過去はつらいことばかりだった *		
	18. 私は、過去の出来事にこだわっている *		

*は逆転項目

表 10 目標指向性と実習の意識に関する調査項目のクロス集計と χ^2 検定の結果

質問項目と選択肢		目標指向性			検定結果	
		低群	中群	高群		
実習前の不安感の意識の変化	楽しみ	0	3	9	$\chi^2(4) = 15.14, p < .05$	
	どちらともいえない	4	3	3		
	不安	29	45	23		
実習後の意識	保育園	楽しかった	14	27	16	n. s.
		どちらともいえない	9	11	7	
		辛かった	10	13	12	
	幼稚園	楽しかった	22	34	27	n. s.
		どちらともいえない	6	7	3	
		辛かった	4	10	5	
教育(保育)者としての向き不向き意識の変化	実習前	向いている	6	8	11	n. s.
		どちらともいえない	16	31	19	
		向いていない	11	12	5	
	実習後	向いている	6	11	14	n. s.
		どちらともいえない	20	29	15	
		向いていない	7	11	5	

表 11 希望と実習の意識に関する調査項目のクロス集計と χ^2 検定の結果

質問項目と選択肢		希望			検定結果	
		低群	中群	高群		
実習前の不安感の意識の変化	楽しみ	1	5	6	n. s.	
	どちらともいえない	1	3	6		
	不安	31	39	27		
実習後の意識	保育園	楽しかった	16	19	22	n. s.
		どちらともいえない	5	14	8	
		辛かった	12	14	9	
	幼稚園	楽しかった	21	37	25	n. s.
		どちらともいえない	5	5	6	
		辛かった	7	4	8	
教育(保育)者としての向き不向き意識の変化	実習前	向いている	3	9	13	$\chi^2(4) = 15.14, p < .05.$
		どちらともいえない	20	22	24	
		向いていない	10	16	2	
	実習後	向いている	3	10	18	$\chi^2(4) = 15.14, p < .05.$
		どちらともいえない	19	31	14	
		向いていない	11	6	6	

表 12 現在の充実感と実習の意識に関する調査項目のクロス集計と χ^2 検定の結果

質問項目と選択肢		現在の充実感			検定結果		
		低群	中群	高群			
実習前の不安感の意識の変化	楽しみ	1	3	8	$\chi^2(4) = 13.75,$ $p < .05.$		
	どちらともいえない	1	7	2			
	不安	33	41	23			
実習後の意識	保育園	楽しかった	19	19	19	n. s.	
		どちらともいえない	5	16	6		
		辛かった	11	16	8		
	幼稚園	楽しかった	26	35	22	n. s.	
		どちらともいえない	3	10	3		
		辛かった	6	5	8		
教育(保育)者としての向き不向き意識の変化	実習前	向いている	7	7	11	n. s.	
		どちらともいえない	18	29	19		
		向いていない	10	15	3		
	実習後	向いている	7	9	15		$\chi^2(4) = 10.57,$ $p < .05.$
		どちらともいえない	22	31	11		
		向いていない	6	11	6		

1) 「目標指向性」と実習前の不安に関する意識の分析の結果

「目標指向性」と実習前の不安に関する意識について χ^2 検定を行ったところ有意差が確認された ($\chi^2(4) = 15.14, p < .05$)。そこで残差分析を行ったところ (表 13) の通り、目標指向性高群と「楽しみ」は人数の偏りが有意に多く、目標指向性低群と「楽しみ」、目標指向性高群と「不安」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表 13 目標指向性と実習前の不安に関する意識とのクロス表と残差分析結果

	楽しみ	どちらともいえない	不安
目標指向性低群 ($n=33$)	0 ▽	4	29
目標指向性中群 ($n=51$)	3	3	45
目標指向性高群 ($n=35$)	9 ▲	3	23 ▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

2) 「希望」と実習の意識に関する調査項目との分析の結果

① 「希望」と実習前の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化の結果

「希望」と実習前の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化に対して χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りに有意差が確認された ($\chi^2(4) = 14.64, p < .05$)。残差分析を行ったところ (表 14) の通り、希望中群と「向いていない」、希望高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、希望低群と「向いている」、希望高群と「向いていない」は人数の偏りが有意に少ないという結果になった。

表 14 希望と実習前の教育(保育)者としての向き不向き意識の変化の

クロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
希望低群 ($n=33$)	3 ▽	20	10
希望中群 ($n=47$)	9	22	16 ▲
希望高群 ($n=39$)	13 ▲	24	2 ▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

②「希望」と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化の結果

「希望」と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化について χ^2 検定を行ったところ人数の偏りに有意差が確認された ($\chi^2(4) = 18.57, p < .05$)。残差分析を行ったところ（表 15）の通り、希望低群と「向いていない」、希望中群と「どちらともいえない」、希望高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、希望低群と「向いている」、希望高群と「どちらともいえない」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表 15 希望と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化とのクロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
希望低群 (n=33)	3 ▽	19	11 ▲
希望中群 (n=47)	10	31 ▲	6
希望高群 (n=38)	18 ▲	14 ▽	6

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$) ※1名欠損値あり

3)「現在の充実感」と実習の意識に関する調査項目の分析結果

①「現在の充実感」と実習前の不安に関する意識の結果

「現在の充実感」と実習前の意識について χ^2 検定を行ったところ人数の偏りに有意差が確認された ($\chi^2(4) = 13.75, p < .05$)。残差分析を行ったところ（表 16）の通り、現在の充実感低群と「不安」、現在の充実感高群と「楽しみ」は人数の偏りが有意に多く、現在の充実感高群と「不安」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表 16 現在の充実感と実習前の不安に関する意識とのクロス表と残差分析結果

	楽しみ	どちらともいえない	不安
充実感低群 (n=35)	1	1	33 ▲
充実感中群 (n=51)	3	7	41
充実感高群 (n=33)	8 ▲	2	23 ▽

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

②「現在の充実感」と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化の結果

「現在の充実感」と実習後の教育（保育）者としての向き不向きに対して χ^2 検定を行ったところ有意差が確認された ($\chi^2(4) 10.57, p < .05$)。残差分析を行ったところ（表 17）の通り、現在の充実感高群と「向いている」は人数の偏りが有意に多く、現在の充実感高群と「どちらともいえない」は人数の偏りが有意に少ないという結果となった。

表 17 現在の充実感と実習後の教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化のクロス表と残差分析結果

	向いている	どちらともいえない	向いていない
充実感低群 (n=35)	7	22	6
充実感中群 (n=51)	9	31	11
充実感高群 (n=33)	15 ▲	11 ▽	6

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, $p < .05$)

4. 考察

(1) 自己肯定感と実習成果

本研究では、実習成果の指標として、自己肯定感と過去に対する自己肯定感の平均得点の差を参考にすることとした。その結果、自己肯定感の平均得点は、過去に対する自己肯定感の平均得点よりも 1.6 点高かった。自己肯定感と過去に対する自己肯定感について対応のある t 検定を行った結果、有意差が見られた。自己肯定感は心理学研究における態度的要素が強いことから、比較的安定した感情であると言える。それにも関わらず、今回の実習を体験した学生の自己肯定感が高まったということは、実習体験が不安を増幅されるよりも、自信がつくなどの自己に対して好ましい影響を与えたことが推測される。同時に、対象となった実習授業が全体的に学生にとって有意義なものとなったことも推測される。これらのことから、このような分析が FD 研究の新しい指標となりうるものと考えられる。

次に、自己肯定感と実習前・後の意識について、それぞれ考察する。まず、自己肯定感と実習前における意識についての χ^2 検定の結果から、自己肯定感高群に含まれる不安群は、他群より有意に人数の偏りが少なかったことが明らかにされた。この結果は、学生にとって実習前の不安があることがかえって、実習を真剣に取り組む要因となり、実習を通して自信を得るなどの好ましい影響を与えていたものと考えられる。その一方で、自己肯定感高群は、そもそも実習前に不安を抱きにくく、自己肯定感低群は不安を抱きやすい傾向にあると考えることができる。したがって、実習前に学生の自己肯定感を測定するなど、事前に学生のパーソナリティを実習担当者が把握しておくことで、よりきめの細かい事前学習の対応が可能になる。

自己肯定感高群と実習前・後の教育（保育）者として向いている群に有意に人数の偏りが多いという結果は、実習を体験し自己成長を図っていく中で、実習は教育（保育）者の専門職としての素地になっていることを示唆する。また、過去に対する自己肯定感高群と実習後の教育（保育）者として向いている群に、有意に人数の偏りが多かったという結果は、該当する学生がすでに教育（保育）者として自覚を持っていたことによると推測できる。確かに実習を体験した学生たちは先行研究と同様、実習への不安を感じていたものの、本研究の結果からはさらに実習を通して、自己成長が図られ専門職としての意識が深まっていったことが確認されたと言えよう。

(2) 時間的展望と実習成果

実習前の不安に関する結果は、時間的展望の下位尺度である目標指向性と現在の充実感に有意差が見られた。2つの下位尺度は楽しみの群に有意に人数の偏りが多い結果となった。これらの群の学生たちは、実習に不安を感じながらも、振り返ってみれば実習が自信を得るなどの好ましい影響を与え、その結果が充実感に繋がっていたものと考えられる。つまり、目標指向性と現在の充実感の2つの下位尺度の高群は、実習前から実習を楽しみと感じており、将来を見通して、意欲的に実習に取り組んでいたといえるだろう。

教育（保育）者としての向き不向きの意識の変化については、時間的展望の希望の下位尺度と実習前・後の教育（保育）者として向いている群に、人数の偏りに有意差が見られた。この結果、

希望高群は、実習前・後共に教育（保育）者として向いていると感じる者が多いと指摘できた。

また、現在の充実感の下位尺度と実習後の教育（保育）者として向いていると回答した群に有意差が見られた。この結果、現在の充実感高群は、実習前に実習を楽しみと感じており、教育（保育）者として向いていると感じ、適正を認識している傾向があることが分かった。

（3）自己肯定感と時間的展望の低群の学生への対応

実習が辛かった、実習前・後で教育（保育）者に向いていないと感じる少数の学生は、自己肯定感と時間的展望において低群である傾向であった。自己肯定感や時間的展望が低い学生については、従来通りの事前学習をおこなったとしても、実習前の不安の否定的感情は解決されていないことも考えられる。このような学生たちは、実習に対する過度の不安が解消されないまま実習に参加し、そのまま実習に対して否定的な感情で終了してしまう可能性が高い。その結果は、将来の就職にも影響することが予想できる。したがって、事前にこのような学生を把握し、学生に見合った事前指導も重要であるといえよう。

もちろん多くの学生が実習中に実習前の不安は解決されていったと考えられるが、実習中に新たな不安が発生したこともいえるだろう。実習期間中は、学生といえども現場の教員と同等の保育を求められる。この不安は、実習前の不安とは違って、実習期間中に学生は責任のある仕事を任されるなどの新たに遭遇する場面に対する不安であり、その都度不安を抱くことは当然のことと思われる。この不安が適度な不安であれば、実習の際に好ましい影響になると思われるが、過度に不安になっている学生に対しては十分に配慮すべきである。

次に、時間的展望の希望の下位尺度について、希望低群と教育（保育）に向いていない（と分類された）群が、有意に人数が多い結果となった。さらに、現在の充実感低群の不安群に人数が有意に多い結果は、実習を体験することによって、教育（保育）者としての自覚が揺らぎ、将来の見通しに不安を残していることを示していると考えられる。このような学生の対応は、実習にあたって、不安となっている原因を把握し、実習期間中に個別指導を行う必要がある。

実習中に発生した不安の対応は、巡回指導時で対応することになるが、実習担当以外の教員が対応する場合もある。実習担当以外の教員に対しては、有効な実習巡回指導を行うために、実習前の学生の状況と実習中に予測される事柄などの情報を事前に提供することが求められる。このような実習担当以外の教員とも連携し、養成校としての組織的な支援体制の構築が求められる。

総合考察

本研究では、実習成果の指標として、自己肯定感と過去に対する自己肯定感の平均得点の差を参考にすることとした。その結果、実習に参加した学生の自己肯定感得点は有意に高くなっていることが確認され、実習成果の指標と共に、FDの新たな基準の一つになる可能性が示されたことは非常に意義深い。時間的展望体験尺度からは、①目標指向性下位尺度の高群は、実習前から実習を楽しみと感じていること、②希望下位尺度の高群は、実習前後共に教育（保育）者として向いていると感じていること、③現在の充実感下位尺度の高群は、実習前に実習が楽しみと感じ

ており、教育（保育）者として向いていると感じていること、が明らかになった。実習を体験することは自己肯定感を高め、教育（保育）者としての適正を認識していくという成果があった。自己肯定感や時間的展望の低い学生は、実習前に過剰な不安を抱くものが少なくないが、実習担当教員が事前に、学生の個別の特徴を把握し、実習期間中に個別指導を行うことにより、より極めの細かい指導が可能となる。このことは、実習授業の改善と同時に、学生たちが教育（保育）者としての進路を決定づける大きな要因となる可能性がある。本研究は、実習授業改善研究の新たな可能性を示した先駆的研究と言える。

注1

本研究は、滝沢真智子・田中道弘（2010）幼稚園教育実習及び保育実習に対する意識に関する研究 教育実践学会第18回大会プログラム要旨集 pp.7-8. に加筆修正を加えたものである。また、本研究は、田中道弘・滝沢真智子（2010）. 過去に対する自己肯定感尺度作成の試み 日本応用心理学会第77回大会発表論文集 p.87. および、田中道弘・滝沢真智子（2010）. 過去に対する自己肯定感尺度得点の試み 埼玉学園大学紀要（人間学部篇），10，341-346. で発表した研究データを別の視点で捉えたものである。

注2

調査項目は、予備調査から学生に教育（保育）者に求められる資質について、実習前・後で表出されると思われる項目を議論させ選出させた。

6. 引用文献

Allport, G. W. (1955). *Becoming*. New Haven:Yale Universtiy press.

井上光一・島崎保・高橋秀典・植田有美子・森脇裕美子（2007）. 保育実習生の保育士観についての研究 日本教育心理学会第49回総会発表論文集，p.383.

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. In D. Cartwrite (ED). New York.

Lewin, K. (1942). *Time perspective and moral*. New York:Houghton Mifflin. (末永俊郎（訳）1954 時間的展望とモラル 創元社 pp.134-164.)

白井利明(1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.

高橋秀典・島田保・井上光一・森脇裕美子・中磯子・田中麻貴（2007）. 保育実習前の実習生の不安要因 日本教育心理学会第49回総会発表論文集，p.183.

田中道弘（2008）. 自尊感情における社会性，自尊感情形成に際しての基準：自己肯定感得点の新たな可能性 下斗米淳（編）シリーズ自己心理学第6巻 社会心理学へのアプローチ 金子書房 pp.27-45.

田中道弘（2005a）. 青年の精神的健康を捉える指標の検討：自己肯定感と時間的展望の視点から自己心理学（日本心理学会自己心理学研究会・日本発達心理学会自己心理学研究分科会），2,26-34.

田中道弘 (2005b). 自己肯定感尺度得点の作成と項目の検討人間科学論究, 13, 15-27.

田中道弘・滝沢真智子 (2010). 過去に対する自己肯定感尺度作成の試み 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 10, 341-346.

塚田まゆみ (2007). 幼稚園教育実習を通じた意識の変容: 保育者を目指す学生の意識調査 1 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, 37, 79-90.

梅田優子 (2002). 教育・保育実習に関する研究の動向 県立女子短期大学研究紀要, 39, 59-67.